國學院大學学術情報リポジトリ

Libraries in Romania : Special Issue The World of Libraries and Books

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sunaga, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000458

ルーマニアの図書館

須永和之

1．ルーマニアの歴史の概観

ルーマニアは古代ローマ帝国のトラヤヌス帝による２度の遠征により、ドナウ川以北の属州ダキアとなった。ダキア人はローマ人と同化して、ラテン化が進んだ。国名のルーマニアRomaniaは「ローマ人の国」を意味する。中世には小国が乱立したがワラキア・トランシルヴァニア・モルダヴィアの三国が鼎立する。三国はタタール人、オスマントルコ帝国、ポーランド王国、ハンガリー帝国などの周辺国からの遠征と侵略におびやかされた。三国のうち、ワラキア公国のヴラド・ツェペシュはオスマントルコ帝国の軍隊と戦い、敵国の兵士を串刺しにしたことから「串刺し王」の異名をとり、のちにアイルランド出身の作家ブラム・ストーカーの著作『吸血鬼ドラキュラ』のモデルとされた。

今日のルーマニアの領域はオスマントルコ帝国の支配下となったが、1699年カルロヴィッツ条約でオーストリア帝国にトランシルヴァニア公国が割譲された。ロシア帝国の支配下になることもあったが、1859年にワラキア公国とモルダヴィア公国が合併して、1861年にルーマニア公国が成立する。ドイツのホーエンツォレルン家からカルロ１世が迎えられて1881年にルーマニア王国となった。

第一次世界大戦ではルーマニア王国は連合国側につき、オーストリア帝国に進撃してトランシルヴァニア併合を目指したが、ドイツ軍の反撃にあって実現できなかった。休戦後、トランシルヴァニア、ベッサラビア（現在のモルドバ共和国）、ドブロジャを併合して大ルーマニアとなった。第二次世界大戦の開戦時では枢軸国側であったが、ハンガリー、ロシアから侵攻を受け、ブカレストは激しい空襲を受けた。1944年の政変で連合国側につき、戦後はロシアの圧政のもとで王政は廃止されて1947年にルーマニア人民共和国となった。

1965年からチャウシェスクが指導者として頭角を現し、国名をルーマニア社会主義共和国と改めて、チャウシェスクは大統領に就任する。1989年のベルリンの壁崩壊後、東欧諸国では民主化が波及して周辺国では次々と無血革命を実現した

が、ルーマニアではチャウシェスク政権への不満から各地で暴動が起きて、ついに大統領夫婦の銃殺刑に至った。

2004年にルーマニアは北大西洋条約機構NATOに参加し、2007年には欧州連合EUに加盟した。

ルーマニアは古代から周辺国から侵略、併合、圧制を受けながら、民族意識を高揚させて国家を形成してきた。本論稿では、チャウシェスク政権崩壊後、社会主義国から資本主義国への仲間入りをする中で、先進諸国の支援と資金、そして影響を受けながら国内の図書館を整備してきた過程を明らかにしたい。

2．ルーマニアの図書館

ルーマニアには2002年5月31日に制定された図書館法(1)があり、図書館法の下に国立図書館、アカデミア図書館、大学図書館、公共図書館（公立図書館・私立図書館を含む）、専門図書館、学校図書館が規定されて、設置されている。2012年の時点(2)で、すべての図書館は11,309館あった。国立図書館4館（ただし国立教育図書館は2014年に閉館した。2018年では3館）、公立図書館2,663館、大学図書館97館、学校図書館7,938館、専門図書館607館である。2012年のルーマニアの人口は2020万人であった。ルーマニア国内には1990年に16,665館の図書館があったが2012年には11,309館に減少した。公立図書館の現象が最も著しく1990年には4,458館だったのが、2012年に2,663館に減少した。社会主義政権の時代のほうが図書館の数が多かった。

3．ルーマニア国立図書館

ルーマニア国立図書館のElena Tîrziman(3)によれば、その起源は17世紀に設立された聖サヴァ修道院に付設された大学の図書館にさかのぼるといわれる。1838年に約1,000冊のフランス語で記された書物の目録が作成されてから利用者に図書館が公開された。1859年にワラキア公国とモルダヴィア公国が連合合併すると、この図書館は国家中央図書館となった。このブカレストの国家中央図書館は、1864年の公法によって1901年にアカデミア図書館に所蔵コレクションが移転するまで、国立図書館としての機能を果たした。法定納本制度により国内の出版物をアカデミア図書館に納本することとなった。アカデミア図書館はルーマニアの芸術作品を残す目的で設立された。アカデミア図書館では芸術作品を収集する側面があった。

1903年から1905年まで、アカデミーの書誌学者でブカレスト大学文学部のルーマニア文学史の教授であったIoan Bianuは、書誌学者Nerva Hodosとともに隔月刊行の書誌学術雑誌*Revista bibliografica*を出版し始めた。現在、ニューヨーク

公共図書館が、この雑誌を所蔵する唯一の機関である。1903年に彼らは最初のルーマニア全国書誌の出版物である *Bibliografia Romaneasca Veche* を発行した。1903年に1508年～1716年に刊行された文献を収録する第１巻が刊行されて、その後、1910年に1716年～1808年の文献を収録する第２巻が、1912年に1808年～1830年の文献を収録する第３巻が発表された（第３巻は1930年まで完成しなかった）。こうした書誌学の著作は、将来の全国書誌の発行を期待させて、Bianuのルーマニア全国書誌家の歴史学者として地位を定着させた。次の主要な回顧的な試みである *Romagnasca Moderna* の４巻は、1980年代初めに公表されたが、共産主義政権の崩壊後まで完成しなかった(4)。

1955年には州立中央図書館と呼ばれたが、チャウシェスク政権打倒後の1990年にはルーマニア国立図書館となった。

国立図書館の成立の経緯にはそれぞれに複雑な経緯があるが、４つの類型が考えられる。

①主に王族の所蔵コレクションを引き継ぎ、それを基礎として成立する場合

フランス国立図書館はフランス大革命後にフランス王家、貴族、教会・修道院が所蔵するコレクションを国民政府が没収して、フランス国立図書館の所蔵コレクションを形成した。

フランスの場合は革命という劇的な機会で王族の所蔵コレクションを国立図書館が引き継ぐことになったが、デンマーク王立図書館、スウェーデン国立（王立）図書館などが同様の事例である。

②主に貴族・蔵書家の所蔵コレクションを基礎として成立する場合

ハンガリーの国立セーチェーニ図書館は、愛国心が強かったとされる貴族セーチェーニ伯がマジャール語の資料を収集したコレクションを基礎として国立図書館となった。

英国図書館The British Libraryの設立の経緯は複雑である。国王の侍医で博物学者であったハンス・スローンの所蔵品を宝くじの売上金で購入したことで、大英博物館が18世紀に設立された。のちにコットン家、ハーレー家からの寄贈を受け、さらに国王ジョージ２世とジョージ３世の所蔵コレクションを合併して、大英博物館の図書部門が充実した。大英博物館の一部門である刊本部英国図書館法（1972年）が成立したのちに、英国図書館セントパンクラス新館が1997年に開館した。英国図書館は王族の所蔵コレクション（ジョージ２世・３世）と貴族・蔵書家の所蔵コレクション（ハンス・スローン、コットン家、ハーレー家）を組み合わせた事例である。

③大学図書館の所蔵コレクションを基礎とする場合

ノルウェー国立図書館は、オスロ大学の図書館が国立図書館と大学図書館の機能を兼ね備えていたが、大学図書館と国立図書館を分離することで成立した。

デンマーク王立図書館は1989年にコペンハーゲン大学の図書館と合併したことで、国立図書館と大学図書館の機能を兼ねることになった。

④議会図書館として成立した場合

アメリカ議会図書館は国政議会の図書館であるとともに、国立図書館としての機能を持つ。日本の国立国会図書館は太平洋戦争後、米国の勧告により、帝国図書館と貴族院・衆議院の議会図書館を統合して成立した。

国立図書館成立の経緯を４つの類型に分類したが、ルーマニア国立図書館の成立は③大学図書館の所蔵コレクションを基礎とする場合にあてはまる。

2002年の図書館法[(5)]によれば、文化宗教省が国立図書館を管轄している。

現在の図書館の建物は、1986年チャウシェスク政権時代に建設予定地が定められて、工事が開始して一部は完成して、政変によって死去する数カ月前の1989年の夏にチャウシェスクは開館を主張して求めたが、開館できなかった。1989年12月の政変によるチャウシェスクの死去後は、工事が一時中断されて建設の進行の停滞を余儀なくされた。2009年からは文化省が主導で建設プロジェクトが進められて、2011年に竣工して、2012年に開館した。

建設資金は112,894,627ユーロをルーマニア政府がヨーロッパ開発銀行の評議会から20年間の融資を受けたことによる。また、韓国の家庭電化製品・電子機器製造企業であるサムスンはルーマニア文化省と300,000ユーロの業務提携を契約した[(6)]。

現在、ルーマニア国立図書館は法定納本図書館であり、国内の出版物を収集して、約1,300万点の資料を所蔵する。特別コレクション[(7)]として、グーテンベルクが金属活字による印刷術を始めた1450年ころから1500年までにヨーロッパ各地で印刷されたインキュナブラ（初期揺籃期本）162点、約11,000点のルーマニア国内あるいは国外の稀覯書、約30,000点の視聴覚資料、約37,000点の手稿書、約48,000タイトルの雑誌、約70,000点の写真がある。

４．サムスンの国立図書館へデジタル環境整備提供

韓国企業サムスンは近年、世界各地の国立図書館にデジタル環境整備を提供している。

サムスンは2014年にベトナム国立図書館にS.hubという青少年が情報に触れて知的刺激を受けるデジタルスペースを設置した。図書館の１階にLFDスクリーンとコンピュータを設置して、２階にはタブレット、デスクトップ、タッチスクリーン、スピーカーを設置している。さらに2011年から2015年までSmart library1.0プロジェクトとしてベトナムの中学校に20万冊、300台のコンピュータ、タブレット、DVDプレーヤーを提供した。中学生約５万人が恩恵に浴している。2015年からSmart library2.0プロジェクトとしてホーチミン市立図書館にもデジ

タル環境を提供している[8]。

2014年マレーシア国立図書館はSamsung Smart Libraryを開設した。60台のタブレット端末を配置して、電子化された書籍・雑誌にアクセスできるようにした。また、児童向けにはタブレットでコンピュータ・ゲームにアクセスできる[9]。

2016年トルコ国立図書館のアーカイブに保存されている貴重な資料や現代の電子出版物にデジタル情報として無料でアクセスできるSamsung Digital Libraryの開設を発表した。このプロジェクトは国立図書館と協力して総額500,000米ドルの投資で実現した。トルコ語、ペルシア語、アラビア語の手稿本27,000冊、オスマン帝国時代から共和国時代までの日刊紙、1928年以来発行された200万以上の新聞、約６万のオスマントルコ時代の定期刊行物、絵画、フランス語と英語の刊行物、Karagöz & Hacivatの文書、映画ポスター、地図、メモ、スタンプ、政治的ポスター、5,000以上の蓄音記録がデジタル化されて利用できる[10]。

５．大学図書館

H. G.B. AnghelescuとE. Chiaburuの論文[11]によれば、社会主義政権時代には48大学があった。チャウシェスク政権崩壊後の1990年以降、大学が新設されて2004年には110大学あったが、徐々に減少して2012年には97大学になった。1990年に約2500万点あったルーマニア国内の大学図書館の所蔵コレクションは増減を繰り返すが、2009年以降、1990年の所蔵点数を取り戻した。

ルーマニアの大学図書館は、通貨レートの変動で外国の図書・雑誌の価格が高騰したため、ルーマニア国立図書館とともに、外国の図書館と資料（図書・雑誌・電子資料）の交換事業を展開している。2013年、ルーマニア国立図書館は48か国の165館の図書館と協定して資料交換を行い、1,691点の図書資料、392タイトルの雑誌、18点の電子資料を収集した。同年、ブカレストのカルロ１世大学中央図書館は36か国の255館の図書館と協定していた。

1989年12月の革命のとき、ブカレストのカルロ１世大学中央図書館は焼け落ちた。共産党本部に近接していたために軍部の反撃による銃撃戦で屋根に延焼した。この火災で４点のインキュナブラ、約50万冊の蔵書、約3,700点の手稿本が焼失したとされる。ブカレスト大学全体の蔵書のうち４分の１が失われた。ルーマニアでは作家が自筆原稿（手稿本）を大学図書館に納める慣行があり、焼失したコレクションには詩人ミハイ・エミネスク、作家・民俗学者・歴史学者・宗教学者であったミルチャ・エリアーデの自筆原稿も含まれていた。1990年１月からスウェーデンとデンマークの王立図書館（国立図書館）の館長が革命後の図書館復興に乗り出して、ユネスコの支援により、ブカレストのカルロ１世大学中央図書館は復興した。

6．公共図書館（公立図書館）

ルーマニアの大きな地方行政区分として県が41あり、首都ブカレストは県と同レベルの地方行政区分として扱われる。ルーマニアの「県」は単数形でジュデツJudeţ、複数形でジュデツエJudeţeである。県の下のレベルの行政単位は人口規模の大きい順に市に相当するムニツピウMunicipiu、町に相当するオラシュOraş、村に相当するコムーナComunăがある。市は320あり、町はおよそ2,900ある。そのうち103の市が、日本で言えば政令指定都市に相当する権限を持っている自治体である。首都ブカレストには行政区に相当するセクターsectorが６ある。

いわゆる県に相当するジュデツJudeţeには県立クラスの図書館がある。首都のブカレストの市内全域には図書館ネットワークが形成されて、市立中央図書館があり、その分館は2018年現在、34館である。このうち、２区（セクター２）にはArtotecaという絵画・工芸の展示スペース、「聴覚図書館」という視覚で不自由を感じる利用者のための録音ディスクを配置した図書館、５区（セクター5）にはNicolaus Olahusという資料請求を受け付ける窓口がある[(12)]。

H. G.B. AnghelescuとE. Chiaburuの論文[(13)]によれば、チャウシェスク政権崩壊直後の1990年に公立図書館は4,458館あったが、1992年に激減して3,000館を下回り、その後2011年までほとんど増減がなく、2012年には2,663館となった。公立図書館は1990年から2012年までに総数の約40％の図書館が閉館した。地方の公立図書館は1990年に2,620館あったが、2008年までほとんど増減がなく、2012年には2,362館となった。地方の公立図書館は1990年から2012年までに総数の約10％が閉館した。一方、都市部の図書館は1990年に204館あったが、2012年には260館に増加した。

公立図書館の利用者はチャウシェスク政権崩壊後の1991年2,226,050人で当時の国民全体の11％であった。1992年に200万人を下回り、その後増加して2000年に220万人に達したが、漸減して2012年には160万人を下回り、1990年と比べて7.5％が減少した。

公立図書館の貸出冊数の総数は1990年におよそ2800万冊であったが、その後漸増して2001年には37,436,155冊に達した。2,146,083人の利用者が平均17.44冊借りたことになった。その後、貸出冊数は漸減して、2012年には21,619,572冊となり、1,527,723人の利用者が平均14.15冊借りたことになった。

公立図書館の総数はチャウシェスク政権崩壊直後から数を減らし40％の図書館が閉館した。公立図書館の利用者は1991年と2000年に220万人を超えて最高水準に達したが、2012年には約153万人と減少傾向にある。貸出冊数も2001年をピークに減少傾向にある。

2008年から米国の非営利組織であるIREX（International Research & Exchange Board）が関与するBiblionetプログラムにより、ビル・アンド・メリ

ンダ・ゲート基金がルーマニアの公立図書館のICT化を推進してきた[13]。米国の非営利団体IREXは米国学術協会・フォード財団・米国社会科学会議・米国国務省によって1968年に設立されて、東欧革命以前からソ連と東欧との学術研究・文化交流を行ってきた。2008年から2009年までの２年間の導入プログラムで総額140万米国ドルが公立図書館のICT化と図書館職員の研修に費やされた。続く2010年から2014年までの５か年計画で2690万米国ドルが費やされた。

出版物の検閲が著しかったといわれるチャウシェスク政権の時代に約4,500館近くもあった公立図書館が、社会主義独裁政権崩壊後の1990年から1992年の間にほぼ40％も失われたのかが今回の調査研究で究明できなかった。1990年から1992年は国内各地での暴動と混迷の中での政権交代、新政権による経済立て直しの最中であったために、公立図書館が閉館に追い込まれて減少したことは考えられる。一時的な社会的な混乱と経済低迷が続いたとしても、その後2010年代になってもルーマニア国内の公立図書館の総数はチャウシェスク政権の時代の図書館総数に到底及ばない。

公立図書館は、民主主義国家を標榜する欧米諸国であれば、国民の文化・社会に対する意識・意見を反映して資料・情報を収集・提供して、政策に対する意思決定を国民に促すように働きかける機関として機能する。あるいは機能すると期待される。独裁政権崩壊後の数年間は混乱のため、公立図書館の復興は無理であったとしても、その後の20年間で公立図書館の復興、総数の増加の兆しですら生じなかったのは不可思議である。

現実の図書館がなくても、1990年代後半からインターネットの登場と普及によって、仮想空間、ヴァーチャルな図書館が現れたことで、利用者の情報欲求を満たすことができたから、公立図書館の総数も貸出率も低下する一方だったと考えることも可能である。

改めて今日の現状から過去に光を照らして考えれば、独裁政権であったチャウシェスク時代に4,500館近くの公立図書館が設立されて維持されたのかが、さらにも増して不可思議であり、一体、独裁政権下の公立図書館の目的が何であったのかを探りたかった。仮説として考えられるのは、独裁政権の思想・イデオロギーを国民に広く伝達する機能が公立図書館に託されていたと考えられる。2010年代になって資本主義国である英国・米国の公立図書館が閉鎖に追い込まれていることを考慮すれば、かつて社会主義国家であったルーマニアで公立図書館にはしかるべき機能が備わっていたと考えるのも可能である。

スフントゥ・ゲオルゲの公立図書館

トランシルヴァニアの古都ブラショヴ近郊の町スフントゥ・ゲオルゲにはコヴァスナ県の図書館がある。1832年に建設された図書館であり、改築を繰り返し

ながらも、当時の趣を残している。スフントゥ・ゲオルゲはハンガリー系の住民（セーケイ人）が多く住む町でコヴァスナ県の中心の町である。この図書館は18世紀の学者ボッド・ペーターBod Péter（ハンガリー人名なので姓・名の順）の名を冠している。ポッド・ペーター（1812-1869）[14]はハンガリー領であったトランシルヴァニア地方出身のプロテスタント系の神学者で、ハンガリー文学史に関する著作を最初に著した。オランダのライデン大学に学び、ライデン大学で図書館に関する知識を身につけたとされる。後に貴族の司書としても活躍した。その学問領域は、文学に留まることなく、ヘブライ語、神学、教会史、歴史、自然科学と幅広かった。

ブラショヴの公立図書館

1888年に建設された産業商工会議所の建物が1969年にブラショヴ県の図書館に改築されて、現在のGeorge Bariţiu図書となった。英語の資料の収集と提供に力を注いでいる。ユリウ・マニウ通りには児童サービス専門の分館がある。この児童図書館は最も活動している図書館で、ルーマニア国内のすべての児童図書館と連携している。おもちゃを多く所蔵して、親子で楽しめる雰囲気を醸していた。

ブカレスト市立図書館

ブカレスト市立中央図書館はロマーナ広場の近くにある木立に囲まれた瀟洒な建物である。１階は貸出用の図書（小説類）を開架した閲覧室、２階はレファレンス資料と新聞雑誌を開架した閲覧室とインターネットに接続できるコンピュータ・ルームがある。ブカレスト市内の図書館はすべてWifi接続できる。

市内の分館のうち、３館とArtoteca（絵画展示スペース）を訪問したが、３館の面積は150㎡以下で狭く感じた。ブカレス市立図書館34館のウェブサイトで面積を公表している分館25館の平均は132.8㎡である。最も大きい分館はBiblioteca Dimitrie Cantemirで会議室、学習室３室があり、400㎡である。最も小さい分館はBiblioteca George Călinescuという多機能の児童図書館で40㎡である。訪問した３館は集合住宅（団地）または鉄筋コンクリートのビルディングの１階にあった。

ルーマニア国立図書館新館に近く、３区にあるEmil Gâleanu図書館は１歳から18歳までの児童青少年を対象とした図書館である。色調は白で内装を統一して、カーペットを敷いて、温かみのある雰囲気を醸していた。集合住宅の一角にあり、施設の面積は135㎡で、2018年８月に図書館内の一部が改装された。

２区にあるメディアテカMediatecaは音楽用CDと映像用DVD、美術全集、音楽と工芸、建築に関する図書資料を中心に収集して、市民に提供する図書館である。施設の面積は150㎡で中規模の図書館である。近年改装して、落ち着いたダークブラウンの色調で家具を統一している。隣接して絵画展示スペースである

Artotecaがある。

３区にあるIon Neculce図書館は、施設の面積が60㎡であり、ブカレスト市内で規模の小さい図書館の部類に入る。集合住宅の一角にあり、成人向けの一般書と児童向けの図書が排架されている。

７．学校図書館

2018年10月８日、ルーマニア上院議会は学校図書館の資料購入費を５％増額する法案を可決した。毎年2000万レイ（日本円で約５億５千万円）増額する。インターネットの新聞România librăの記事[15]によると、チャウシェスク政権崩壊後の1990年代からルーマニアの図書館は減少して、図書館の利用者の半数近くの49.2％が学校図書館を使う世代であることが判明した。

2018年４月23日世界図書デーWorld Book Dayに、2016年のEU諸国の書籍・新聞・文房具の消費量、国民一人当たりの1日の読書時間[16]が発表された。EU加盟15か国と、ノルウェー、トルコ、セルビアの20歳から74歳を対象にした読書時間の調査によると、EU諸国内で最下位のフランスは２分で、次に低かったのはイタリア、オーストリア、ルーマニアの５分だった。EU加盟国ではないがトルコは７分、セルビアは６分だった。この調査で最高位はエストニアで13分、次にフィンランド、ポーランド、EU加盟国ではないがノルウェーが12分だった。ちなみにフランスで読書をすると回答した人で読書に費やす時間は１日平均１時間であり、調査に協力した人の全体で平均すると読書時間は短くなるが、読書を常日頃からする人たちは長い。いずれにしても、ルーマニアはフランスに次いでイタリアとオーストリアとともに国民の読書時間が短いことが判明した。EUの統計から判明した読書時間の短いことも、ルーマニア上院議会での学校図書館の資料購入費増額の根拠になっている。国民全体の読書時間が短いことは、書籍の売り上げ増加に結び付かず、出版業の衰退の危機に陥る可能性も生じる。そこで将来の読者である児童青少年の読書意欲を高めるために、学校図書館の資料購入費増額の法案が決議された。

ルーマニアの学校制度について述べる。初等教育課程は就学前教育の幼稚園の上級生５歳から６歳児の段階１年間（予備学年）と小学校の４年間を含めて５年間、中等教育前期課程は中学校の４年間、中等教育後期課程は高等学校の４年間の５・４・４制である。義務教育期間は６歳から14歳まで、予備学年から８学年までである。地方では学校統合化のため小学校、中学校、高等学校が併置された学校が多く、小中併置校、中高一貫校も多い。

AnghelescuとChiaburuの論文[17]によると、まずルーマニア国内の学校数は1992年から1998年まで16,000校を超えていたが、2002年から著しく減少して、2012年には6,000校を下回わった。それに対して、学校図書館は1990年に10,029館

あったが、2012年には7,988館に減少した。学校数の減少に比べ、学校図書館の減少が抑えられているのは、学校の統合化があっても、それぞれの課程の学校図書館が設置されているからである。今回訪問したトランシルヴァニア地方のプレデアルのMihail Saulescu学校とスフントゥ・ゲオルゲのMikes Kelemen学校は、ともにLiceul（フランス語のLycéeに相当して、高等学校）であるが、小学校から高等学校が併置された学校で学校図書館は共有されて一カ所だった。

学校図書館の資料購入費を含む運営費は2000年以降、教育省からも地方自治政府からも全くと言っていいほど支給はなく、書架や机・椅子を含む調度品は新しく購入できず、資料は寄贈に頼っている実情である。スフントゥ・ゲオルゲのMikes Kelemen学校のドキュマンタリスト教員のKiss Lászlóは書架を自前で製作していると語っていた。こうした現状のため、年間2000万レイの予算が支給されたとしても、国内の約8,000の学校図書館に平均して2,500レイ（日本円で約７万円）である。十分な資料購入費とは言えないため、寄贈に頼らざるを得ない。

2002年から2008年までフランスとルーマニア政府の共同プロジェクトで、フランスの中等教育学校の図書館制度（CDIとドキュマンタリスト教員）が導入された。フランスの学校図書館は、就学前教育の学校であるÉcole maternelle（幼稚園）と初等教育学校のÉcole élémentaire（小学校）に図書館資料センターBCD(Bibliothèque Centre Documentaire)があり、中等教育前期課程のCollège（中学校）と後期課程のLycée（高等学校）に資料情報センターCDI（Centre de Documentation et d'Information）がある。フランスの幼稚園と小学校の図書館であるBCDには専門の教職員は配置されないが、中学校と高等学校の図書館であるCDIにはドキュマンタリスト教員が配置される。2002年から2008年の共同プロジェクトの期間、ルーマニアから教職員がフランスでの学校図書館の研修に赴いた。

新たな学校図書館制度は、2000年に国内６県の13校に導入されて、2002年に21県の32校、2003年に231校、2004年に322校、2006年には全41県ごとに８校、同年、全県ごとに２校追加された。2007年には全県ごとに10校が加わった。

AnghelescuとChiaburuの論文[18]によると、2012年の時点で学校図書館職員はフルタイム職員が485人、パートタイム職員が262人、時間給職員248人、無給ボランティアが104人であった。ドキュマンタリスト教員はフルタイム教員が292人、パートタイム教員が13人、時間給教員が４人、無給ボランティアでの待遇が５人いた。

８．専門図書館

ブカレスト市内には、ブリティッシュ・カウンシルの図書館、フランス文化研究所の図書館、ゲーテ・インスティテュートの図書館、セルバンテス研究所のル

イス・ロサレス図書館がある[19]。

9．ブラショヴの学校博物館の古典籍コレクション

ルーマニア第二の都市でトランシルヴァニア地方のブラショヴBrasovに、初めてルーマニア語で教育を行った学校があり、現在は博物館として公開されている。ブラショヴの城壁のシュケイ（セーケイ）門の外側に位置して、聖ニコラス教会の敷地内にある。学校は1495年に建設されて、15世紀にはルーマニア語による教育が行われた。というのも、ブラショヴはドイツから移住したザクセン人が作り上げた街で、19世紀までルーマニア人、ハンガリー人、ブルガリア人は城壁内に入ることが許されなかった。1918年トランシルヴァニアがルーマニアに併合されても、ドイツ人が街を去ることはなかったが、第二次世界大戦後、ソビエト連邦の支配下になるとドイツ人の多くが街を去った。

この学校ではルーマニア最初の活字印刷が行われた。現在、活字印刷機が残されている。

学校は1941年まで存続して、1965年に博物館として開館した。

1652年にトゥルゴヴィシュテで印刷された法令集、1688年の『ブカレストの聖書』を含む古典籍を所蔵する。

10. 電子図書館

ボーダフォン・ルーマニアVodafone Romaniaと出版社Humanitaは業務提携して、2012年５月から10月まで首都ブカレストの地下鉄のヴィクトリア広場Piaţa Victoriei駅に電子書籍とオーディオ書籍をダウンロードできるデジタル図書館を実験的に設置した[20]。駅構内に図書館の書架に排架された書籍のポスターが掲示されて、通勤客は書籍の背に分類ラベルのように描かれたQRコードをボーダフォンで読み取ると、電子書籍49点とオーディオ書籍10点まで期間中無料でダウンロードできた。閲覧用ソフトはボーダフォンが開発したものだった。ダウンロードできる電子書籍とオーディオ書籍はすべてルーマニア語の書籍であった。ボーダフォンの販売促進と電子書籍の普及を兼ねた実験的な試みではあったが、画期的であった。

11. 結論

ルーマニアの図書館は1989年のチャウシェスク政権崩壊後、欧米諸国の支援を受けて、図書館を整備してきた。1989年の革命の際、ブカレストのカルロ１世大学中央図書館は炎上して、建物とともに多くの貴重な資料を焼失した。スウェー

デンとノルウェーの王立図書館長ら、ユネスコの協力で復興した。公共図書館（公立図書館）は米国の非営利団体の支援を受けてデジタル化と職員の研修を実現した。学校図書館は2002年から2008年までフランスの中等教育学校の学校図書館であるCDIとドキュマンタリスト教員の制度を取り入れて改革してきた。

ルーマニア国立図書館はすでにチャウシェスク大統領が在任中から建設がすすめられたが開館には至らなかった。革命後、韓国企業サムスンによる資金援助を受けて2012年に開館した。

2000年以降、インターネットの普及、デジタル化が進展して、ルーマニアの図書館の様相は大きく変貌を遂げた。

ルーマニアの図書館の歴史

	国家	図書館
1838		聖サヴァ大学図書館公開
1859	ワラキア公国とモルダヴィア公国が合併・統合	国家中央図書館設立
1861	ルーマニア公国の成立	
1881	ルーマニア王国の成立	
1901		アカデミア図書館が国立図書館となる
1903-1905		Ioan Bianu と Nerva Hodos が書誌学術雑誌を刊行
1989.12	ルーマニア各地暴動 チャウシェスク大統領夫婦、銃殺刑	国立図書館の一部が完成するが、建設の進行が停滞する
1990		国内各地の図書館の復興
2002		ルーマニア図書館法制定
2004	北大西洋条約機構NATOに参加	
2007	欧州連合EUに加盟	
2009		国立図書館建設を文化省が主導する
2011		国立図書館竣工
2012		国立図書館開館 Vodafoneが地下鉄駅でハイブリッド図書館設置

注

（1）ルーマニア図書館法は2002年５月31日に制定されて、同年６月18日に施行された。2005年２月11日に一部改定された。https://lege5.ro/Gratuit/gm4tenbz/legea-bibliotecilor-nr-334-2002（参照：2019.1.8）

（2）Anghelescu, Hermina G.B. and Chiaburu, Elena. *Regime Change in Romania: A Quarter-Century Impact on Libraries*（参照：2019.1.8）
https://www.ideals.illinois.edu/bitstream/handle/2142/89837/63.4.anghelescu.pdf?sequence=2（参照：2019.1.8）

（3）Elena Tîrziman. *Partnership Patterns at the National Library of Romania.* Social and Behavioral

Sciences 163（2014）. pp.99-103（参照：2019.1.8）
https://core.ac.uk/download/pdf/82469968.pdf
（４）ルーマニアの全国書誌
https://www.library.illinois.edu/ias/spx/slavicresearchguides/nationalbib/natbibromania2/（参照：2019.1.8）
（５）前掲書（注１）
（６）https://americanlibrariesmagazine.org/2013/01/28/romanias-new-national-library-remains-a-dream-yet-to-come-true/（参照：2019.1.8）
（７）ルーマニア国立図書館の特別コレクション
http://www.sbc.org.pl/Content/161107/1_bn_4_2014.pdf（参照：2019.1.8）
（８）韓国企業サムスンによるベトナム国立図書館のデジタル環境整備
https://www.vir.com.vn/samsung-opens-shub-sharing-space-at-vietnam-national-library-46060.html（参照：2019.1.8）
（９）韓国企業サムスンによるマレーシア国立図書館のSamsung Smart Library
https://vernonchan.com/malaysias-national-library-goes-smart-with-samsung/（参照：2019.1.8）
（10）韓国企業サムスンによるトルコ国立図書館のデジタル・ライブラリー
https://news.samsung.com/global/samsung-electronics-turkey-presents-the-digital-library（参照：2019.1.8）
（11）前掲書（注２）
（12）ブカレスト市立図書館の分館　https://www.bibmet.ro/filiale/（参照：2019.1.8）
（13）前掲書（注２）
（14）ボッド・ペーターの経歴は入手できる情報が少なく、インターネット版のEncyclopedia Britannica（https://www.britannica.com/biography/Peter-Bod）（参照：2019.1.8）を参考にした。
（15）https://romanialibera.ro/politica/senatul-a-aprobat-cresterea-fondului-de-carte-din-bibliotecile-scolare-755795（参照：2019.1.8）
（16）https://ec.europa.eu/eurostat/web/products-eurostat-news/-/EDN-20180423-1（参照：2019.1.8）
（17）前掲書（注２）
（18）前掲書（注２）
（19）https://romanialibera.ro/special/documentare/biblioteci-in-bucuresti-121758（参照：2019.1.8）
（20）https://ebookfriendly.com/digital-library-on-the-bucharest-metro-station-pictures/?fbclid=IwAR3xOOWuFyaUpQEWFtNhjX5ibRuvyCN4jZ5asfwHkuYJsxVfV2p7pi2k2ts（参照：2019.1.8）